対談・建設業に生きる土木技術者の生活

飯吉精一・安　昌克

工学士が<組>に入って

飯　吉　これから，「職業としての土木技術者」ということについて，特に建設業の土木技術者ということを念頭において，お話し合いをするわけですが，よろしくお願いします．私は戦前派であり，あなたは戦後派ですね――私は戦後の新制教育を受けた方を戦後派と考えています――．戦前派，戦後派という言葉があるとおり，戦前と戦後では日本の様相は全く変わったし，そこに大きな断層が見られることは否定できないことだと思います．したがって，ともに土木建設業の技術者ではあるけれども，私とあなたとの間には完全には重なり合えない時代的断層が存在することが予想されるのです．そこでお互いに個人的な経験が強く打ち出されることになっても仕方がないし，思想上の不一致も避けられないと思うわけです．そこで，まず最初に私のほうから，あなたには未知の世界である戦前の建設業に生きた土木技術者について私の体験なり見聞なりを通して，お話してみたいと思います．われわれの仲間が集まると，「戦前はよかった」という言葉が必ず出てくるのですが，このような回顧的な態度は捨てて，当時の様相をできるだけリアルにお話したいと思います．ただ，私もあなたも大学卒なので大学卒の建設土木技術者を中心とした話にならざるを得ないと思います．

私が建設業に入った昭和の初めから終戦までの昭和期のわが国の動向を顧みますと，その前期である昭和1桁代の不況期と，その後期である2桁代の戦時期の2つの時代に分けられると思います．そして，建設業は，その前期の社会的不況期にもかかわらず，その形態をある程度整えたといえると思います．その証拠に，多くの土建会社がこの時期に株式会社になっています．後期の戦時状態時では建設業の発展は休止しており，また土木建設業の舞台は，大陸や南方などの外地に移っていったわけです．

ところで私は，第一次世界大戦や関東大震災などの後遺症の残った昭和初期に大学を終え，不況期にあった建設業に入ったのですが，そのころはまだ<学士さま>には希少価値がありました．『学士さまなら娘をやろか』という本がベストセラーになった時代で，専門書には工学士何某というように堂々と工学士の肩書きが書き入れられ，いまの工学博士くらいの権威が認められていました．当時土木科のあったのは，東京・京都・九州・北海道大学だけで私学にはなく，そのほかには専門学校として高等工業学校が熊本・徳島・金沢・名古屋・仙台にある程度でした．したがって，土木技術者の数は限られており，まして民間の建設業に在職する大学出はまことに微々たるものでした．そこでわれわれは，参謀肩章こそ付けていませんでしたが名実ともに幹部教育を受けることができたのです．しかし，当時の封建的社会においては

飯吉精一氏
名誉会員　工博　鉄建建設（株）顧問
（明治 37 年 2 月 27 日生）

建設業の社会的地位はきわめて低く，受注産業という宿命の建設業は，請負人なる名称のもとに，何かと肩身の狭い思いをしたものです．一流料亭のおかみが，「うちにくる人は，上は大臣から下は請負人まで」と言ったという話があったほどです．労多くして功少ない職業だと嘆く先輩もおりました．また，実際の生活も恵まれていたとはいえず，例えば，当時の工事は山間部のうえ短期間のものが多く，そのため転勤が多く，業者は単身赴任が建前のために家族とは常に別居がちで，不遇というほかはありませんでした．ただ給料だけは官庁に比べて大差がなく——私の初任給は 100 円，同窓の官庁での給料は 85 円とのことでした—，恵まれていたのかも知れませんが，監督者には休日があるのに請負人には盆暮以外には休日はなく，一年中現場生活で，余暇を楽しむこともなく，自分の生活上の苦痛などを考えてみる暇もありませんでした．末は博士か大臣かと言われた大学出の世界とは無縁のものでした．そのような状況でわれわれが辛抱できたのは，職業に対する愛着と使命感だと思います．当時，工事場で建設労務者たちまでが，自分はこのダムの現場，あの橋梁の工事をやったと自慢顔で話しているのを，よく聞いたものです．

以上が戦前の私の体験ですが，戦後派のあなたは，このような話をどのように受け取られましたか，まずそのあたりからうかがいたいと思います．

安　お話をうかがいまして，先輩の方々が建設業の世界でいかに苦労をされ，よくぞ建設業をここまで育ててこられたかが実感として理解できたような気がして，衿を正すような気持ちです．戦後派と申しましても，新入社員であったわれわれに，じかに土木屋としての教育・訓練をして下さった方々は，飯吉先生より 10 年から 20 年くらい後の世代でして，その方々から，今うかがったようなことを聞かされ，叱咤激励されました．その記憶がありますので，飯吉先生のお話も全く想像もできないというわけではないように思います．そこで，いまお聞きした戦前の姿と私が経験した戦後の姿とを対比させながら感じたことを申し上げてみたいと思います．

土木技術者が毎年 100 名も入社する時代

私が大学を卒業したのは昭和 34 年ですが，昭和 30 年代は，土木建設業史からみますと，戦前の発展期，戦中の統制期，戦後の復興期という苦難の道を歩んだ建設業が，先人のご努力のお陰で一つの黄金期に到達した時代と言えるのではないでしょうか．名神高速道路・東海道新幹線・大きなダムのプロジェクトなどがどんどん着工され，また，現在大きな問題を投げかけている臨海工業地帯のコンビナート工事などもぽつぽつ始まったころでした．私，大学を卒業するにあたって，就職先を決める際に，土木事業の広範囲さに目移りがして困ったことが今でも記憶に残っております．後であれをやればよかったと後悔しないように，将来自分に向いている分野がわかったときに，どれでもできるように，また，土木の仕事というのは実際に自らの手で物をつくることが大きな楽しみになるのではないか，そのためにはすぐ現場に接触できるところがよい，というたいへん欲張った考えもあってゼネコンの大どころに入社するということになったのです．先生の時代には大学出で建設業に入られる方々は少なく，入ってからも特別な扱い方をされたと先程うかがいましたが，われわれの年代はちょうど黄金期で工事の量がふえたこともあって，大学出が沢山入るようになりました．例えば鹿島建設の場合，大学卒の入社人数は昭和 30 年には 15～16 名ぐらいだったのが，毎年 10 名ぐらいずつふえ，私の入社した 34 年には 47～48 名くらいになっていました．それが 35～36 年には 60～70 人もの大学卒が入社するようになり，高校出を含めて土木技術者と称する新入社員が毎年 100 名を超えるという状態が続いておりました．当時はこんなに人をとってもこなし切れないほど工事量が多い．ですから，入りたてのわれわれも，残業に継ぐ残業でした．

ところで私個人のことを申しますと，現在まで非常に特殊な経路をたどって建設業の中で生活してきた，というふうに感じています．入社して最初の 1 年は水路構造物の設計の仕事をさせられました．さっそく学校で教えられた構造計算などが役立ち，さながら学生生活の仕上げのような感じでした．それが 1 年間で終わり，引き続いてその現場で施工を担当することになりました．この現場に結局 3 年間おりましたが，自分たちが書いた実施設計図に基づいて施工するという非常に恵まれた環境にいたわけです．土木技術者というのは理論だけではなく後の施工の範囲までを含めた理解の仕方が必要であり，それが基本的条件じゃないか，ということをその現場での 3 年間につくづく教えられたのです．例えば，学校で学んだことをそのまま見よう見まねでやった結果，ハン

チのつけ方が悪く施工しにくいと怒られたり，配筋の問題にしても，他の構造物とのとりあいの問題にしても，すべてそんな調子でした．それから後 5～6 年も民間工事を主体とした現場生活でしたがその間にもう一つ貴重な体験をしました．それは，ある自動車会社のテストコースの土工工事を担当したときのことですが，私はその工事で品質管理にタッチさせられました．たまたまその会社が全社あげて品質の向上を図る目的で，当時としてはまだ新しかった品質管理，いわゆる SQC・TQC などの品質管理をすべての部門で一貫してやることになり土木工事もそれに含まれていたのです．そこで統計の勉強をする羽目になったわけですが，いろいろ複雑な条件のもとで行われる土木工事では，理論と現実のギャップは大きく，私のような若僧がいくら頑張ってみてもとても及ぶものではありませんでした．しかし，これによって，土木技術の特殊性や，工場生産との違いを身をもって痛感できたこと．これは非常に貴重な体験だったと思います．このように時代が変わり，いろいろ条件も変わっていると思いますが，物をつくるという素朴な喜びがまだ感じられましたし，それが身近にあった時代に，私は現場生活を送ることができたと思うのです．

大いなる変貌をとげた建設業

飯　吉　お話をうかがって，あなたの年ごろまでのわれわれの生活と現在のそれとでは，大変な相違があることがわかりました．それは職場である建設業のフィールドが，根本的に変わってきたからだと思います．個人的な問題として戦前と戦後の違いをとらえるということが建設業の土木技術者について考える上で必要なことと思いますが，それよりも，職場である建設業というものがどのように変わってきたかということについて，私自身もう一度振り返り，これから取り上げてみたいと思う建設業に従事する土木技術者の生きがいというような問題に取り組むための基盤にしてみたいと思います．

戦前はすべてが軍事的でしたが，戦後は人道主義的になったと思います．土木の技術に関しては，戦前の施工は人力的であり，戦後のそれは機械力的であるといえます．さらに，材料は天然材から人工材になり，工事は大型化・複雑化・高度化され，現場は山間部から都市部へと集中するようになりました．土木技術者の仕事も専門化・細分化・多角化・高度化されました．また，請負業と言われたものが建設業になり，組組織だったものが株式会社となり，地下足袋姿の請負人がヘルメットの会社員となりました．会社の気運も，一家・同族的なものから社員組合的になりました．本社の玄関を一度もくぐらず，社長と一度も話すこともなく，専門分野の仕事から歩も離れることもできずに退職してしまう人がほとんど，というような時代になったのですね．われわれの時代には，社長は親替わり会社は自分の家のような気持ちでいたものです．大変な変わりようだと思います．私は若山牧水の「白鳥はかなしからずや，空の青，海の青にも染まずただよう」の白鳥のように，戦後は現在の会社環境になじめず，孤独感をときどき味わされていたのです．次に建設業の問題を検討する上で重要な，その体質的な変遷について触れておかねばならないと思います．建設業は，請負業としてスタートした明治の初めには，個人的金主――資本を出す人――と人夫出しを本業とする稼業人との合作体でした．それが，戦前には金主と稼業人は単一化され，金主はなくなり，資本は銀行から借り入れて賄っていたのです．そして戦後，請負業が建設業と改まるようになると，次第に施工会社としての性格から離れ，施工は下請にまかすようになり，営業は多角的となり，商社的性格を帯び，複雑な内容の企業体に建設業は変わりつつあると言えます．具体的に言えば，戦後には土木建設業者は建築部門にも手を伸ばし，建設プラントとか，不動産業などの関連産業にもその業務を拡大していったわけです．

腕をみがくことがすべて

このように職場自体が変転したために，建設土木技術者の性格も変えられたと思います．われわれのような戦前の土木技術者は，施工技術者としての腕をみがくことがすべてだったわけで，また，職務でもあったわけです．戦後は，施工技術で腕をみがきたいと思っても，会社の業務の多角化などの事情で，必ずしも自分の希望する方向に才能を伸ばすことはできなくなったのではないでしょうか．このような点から，土木技術者は，戦前と戦後とではどちらが幸福かという問題は，簡単には決められないと思いますが――．

しかし，少なくとも私は，施工技術オンリーの戦前の建設業で生きられたことを，非常に幸福だったと思います．あなたはどのようにお考えになりますか？

安　昌克 氏

正会員　鹿島建設（株）秘書室課長　（昭和 11 年 5 月 1 日生）

社会のニーズが建設業を変えた

安　いまのお話で，戦前と戦後の大きな違いというのが，各分野について浮き彫りにされたわけですが，一口で言えば，結局建設業を取り巻く環境が変わったからということができると思います．何が一番変わったかというと，やはり建設業に対するニーズ，その変わり方が非常に大きいと私は思っています．

戦前の土木工事は，公共工事が非常に大きなウエイトを占めておりましたが，施主である官側では明治以来の日本の技術導入の経緯をみても，技術のレベルアップの主導権をすべて握っていたと言えます．そういうわけで建設業者に求められる機能というのは，官側で考えた計画なり設計を，忠実に実現してゆくという具体化の段階——施工——が中心になっていたんだと思われます．

ところが戦後，臨海工業地帯の隆盛，ビルブームというように，民間工事が非常に伸びてゆくにつれて，建設業者のほうに求められる機能がだんだん拡大してまいりました．私が建設業に飛び込んだのは，そのように民間工事がどんどんシェアを伸ばしていった時代でした．したがって，設計計画の段階から——本当に計画と言えるようなものが出てきたのはごく最近ですが——，ともかく要求された機能を果たすような構造物を，設計の段階から参画して，注文を聞きながら具体的なものにしてゆくということがぼつぼつ盛んになってきた時代だったと思います．ですから土木技術者にとって，設計の能力というものが非常に重要になってきます．また，臨海埋立地など，地盤的に問題のある地点に立地する工事が多く基礎構造物のウエイトが大きくなりましたので，土質工学を中心とした研究開発と施工技術との結び付きというような新しい分野が，土木技術者の日常の業務に，密接な関係をもってくる時代でもあったと思います．

そういうことで，われわれの仲間だけを見ても，戦前からの流れをくむダムだとかトンネルというように山間僻地で頑張っているものもおりますが，中には埋め立てたばかりの茫漠とした砂漠のようなところで，設計図面もまだ完備しておらず，そばでコンサルタントが作成しつつある図面をのぞきに行っては，測量して構造物をつくる，というような生活をしている者もおりました．また，会社に入ると同時に研究所へ回されて，大学の研究室の延長のような仕事をし——まあ，内容としては，現場で発生した問題の解決というような身近で緊急な課題を抱えているわけですが——，電車で通勤というような生活をしている者もおり，設計部門に入り，朝から晩まで複雑な計算をし，図面を描くという生活を送っている者もいます．このように，われわれの仲間に限ってみても，仕事の内容はとてもバラエティーに富んだものになってきています．同窓会などは，各人の業務の内容，それに対する各人の考えというような情報交換の場となり「お前そんなことをしていたのか」というような驚きの声があちこちで上がるというような時代だったのです．

つくることだけでは済まない時代へ

さらに 40 年代の後半になると，単につくるということだけではなしに，建設業を取り巻く周辺環境との社会的関係が非常に問題になってきました．世の中に役立つと思って一生懸命つくったものが，実際にできてみたら周辺に生活する人びとに，当初予想もしなかったような思わぬ影響を及ぼすようになったり，工事の契約をして立派な仕事をしようと勇んで現場へ乗り込んでいったのに，実は建設予定地点はまだ用地買収の話がついていないからしばらく工事を待ってくれとか，地元との話合いが済んでいないから，立居振舞に細心の注意を払ってくれというように，社会的制約が複雑多様になってきました．つくることは良いことなんだと全精力を投入して働いてきたのが果たして正しかったのだろうかと考えざるを得ない時代になってきたわけです．

そしてもう一つ，業務の内容につきましても，先生から先程ご指摘がございましたように，企業規模の拡大に伴って分業化が著しくなり，専門化・細分化が進んで，最初の段取りから仕上げまでトータルに手掛けるというような仕事の仕方はとても考えられないようになってきました．技術者各人は一つの歯車にすぎなくなり，物をつくるということとは直接に結び付かないような業務が非常にふえてきました．しかし，そのような業務は無用なものではなく，企業の中ではどれ一つをとってみても必要欠くべからざるものであり，そういう意味で，昔ほど素朴な喜びに触れる機会というのが少なくなったのではないかと思います．こういった問題は土木に限らずすべての分野で起こっているらしく，高度な産業化が人格の喪失や人間疎外の問題をもたらし，そういう状況でどのようなところに生きがいを求めるかといったことが，実社会での重要なテーマになりつつあるような時代，今日を迎えたのだと思います．現場にいる者は現場にいるなりに，本社の管理機構にいる者はそれなりに，どこに生きがいを求めるべきかという問題に遭遇し，悩んでいるというのが，現代の姿ではないかと思われます．

どこに＜生きがい＞を求めるのか

飯　吉　いまのご意見，私も全く同感です．あなたの戦後に関するお話と，私の戦前に重点を置いた話を合わ

せると，歴史的な流れがよくわかると思います．戦前の土木建設業というのは軍とか官とかの公共事業がほとんどだったわけですが，戦後民間の土木事業が急速に勃興し，現在では半々くらいだと思います．それほど民間の土木事業がふえたわけです．ところが，公共工事の扱い方と民間のそれとでは，建設業者にしても大変な相違があるのですし，お話のとおりこれも戦前と戦後を考える場合の大きなファクターの一つだと思うわけです．

次に，昔は土木工事といえば鉄道とか水力発電とかに限られていたのですが，戦後は，港湾とか道路というように多方面化してきました．それによって土木技術者の専門化が激しくなったのも，ご指摘のとおりだと思います．戦前は先程申しましたように技術オンリーですんだのですが，戦後は社会的な問題が，建設業者，したがってそれに従事する建設技術者を悩ませ，仕事の内容も非常に分業化されてきて，これもご指摘のとおりです．

戦前は物事が単純でしたが，戦後はすべてのことが複雑になってきています．そこで，あなたの言われるとおり，戦前の建設土木技術者とは異なるる悩みのあることも理解できます．しかし，悩むだけでなく，それを解決する，あるいはそれに対する対策というのか，戦前の土木建設技術者の持っていた生きがいのようなものとは異質なものであっても，やはりなんとかしてそれに代わるべき生きがいのようなものを見い出さなければならないのではないでしょうか．これから少し，そういう問題について話し合いたいと思います．

私は，戦前戦後といかに世の中が変わっても，土木建設技術者として不動の一つの生きるべき道がなければならないと思うのです．しかし，戦後，そういう問題は非常にとらえにくくなったと思えるのですが……．その一つとして，職業と生活の問題があげられると思います．戦前は職業本位で，自分の職業に生命を打ち込める雰囲気にあったと思うのです．しかし，戦後は生活本位になった．つまり職業より生活が尊重されるようになった，と思えるのです．ですから，これからの土木という公共性の強い職業に従事する土木技術者の課題は，職業と生活との調和ということだと思うのです．

もう一つは，戦前派は師匠と仰ぐ先輩を持つことができたのですが，戦後派の中からはまだ，師匠と仰ぐ先輩が出現していないと思うのです．この点でも，戦後派は戦前派に比べ，不利な立場にあるのではないかと思います．具体的に申しますと，戦前の建設業の知性派の巨頭として，菅原恒覧・鹿島精一らの人をあげることができますが，これらの先輩の言動によってわれわれは大いに生きがいを見い出すためのヒントを与えられたと思うのです．菅原恒覧は，土木工業協会理事長を辞任するにあたり，「聖戦すでに4か年，これから新秩序建設に入らんとするときにあたり，その急先鋒となるものは，これ技術者でなければならぬと考えます．それも土木建築の技術者でなければなりません」と，その使命を述べています．また，鹿島精一は座談会で「この業界をぜひ改革し改良したいという抱負があり，実は学校出てすぐ飛び込んだのです」とその抱負を語っています．これらは私の記憶に残るほんの一例ですが，これらの言葉からも，戦前の土木人の使命感や抱負をうかがい知ることができると思います．ところが戦後の若い建設土木技術者には，その目標とする先輩がいないために暗中模索しているように私には思えるのです．だからといって放てきしておくわけにはいかないと思います．それに対しては，例えばこのように戦前派と戦後派が建設的に話し合うことなどにより，なんとかそこに一つの土木技術者の進むべき道，生きがいのようなものが見い出されるのではないでしょうか．一つご意見をお聞かせ下さい．

新型土木技術者の誕生

安　これまた，非常に難しい問題でなんと申し上げてよいのやら……．戦後の非常に大きな特質というのは，個と言いますか個人といいますか，その位置づけが非常に高くなったことだと思います．また，われわれ以降の年代になると，この仕事は国のためになるのだ，多くの人びとに喜ばれる価値ある仕事なんだ，というような考え方をする人はあまりいないのではないかと思います．なぜ考えないのか，と言われても困るのですが，そういう発想の仕方をしないというか，物の考え方自体が変わってきているのだと思います．

では，どのような考え方をするのかというと，自分自身がどうあるべきかというように，まず自分から出発して物事を考えてゆき，それで目標を達成することによって，先程のお話の，＜人びとのため，国のため＞という所に結び付けられれば大変結構という形なのです．しかし，その結び付けるというのは，あくまで結果的に出てきたことであって，発想の根源は自分自身の個の確立ということだと私は思います．そのような考え方をするようになった一つの要素として，戦前は，物事を判断する場合に基準となるものが，比較的単純――と言ったら失礼かも知れませんが――だった，少なくとも，そう幾つもなかったのではないかと思うのですが，現在は仕事の内容だけをとってみましても多様ですし，お得意さんもいろいろな分野にわたってあるというように，それぞれの環境で考え方の基準になるべきものが沢山ある，ということが言えると思います．きざな言葉で言えば価値観の多様化ということだと思います．何も生きがいというようなものを一つにしぼらなくともいいのではないか，

家庭第一という人がいても，戦前のように使命感に燃えている人がいても，また，自己の啓発こそ最も重要だという人がいても，それは人それぞれの生き方であり，こうでなくてはならない，というように画一的に考える必要はないんじゃないか，逆にいえば，画一的に型にはめこめにくいのが現代ではないだろうかと思うのです．

つまり，あまり形式ばらず，肩に力を入れずリラックスした物のとらえ方というのが，一般的であると思います．リラックスという言葉は適当ではないかもしれませんが，現実には終始一貫してリラックスしているわけではなく，あるときはこう考えたが，次の日になってみたら180度近い考え方の変化があった，というように，現実の中で揺れ動いている，模索している，ということだと思います．そこで，先輩の問題にしても，模範となるような生き方をしている方のすべてを取り入れるのではなく，自分なりに判断を加えている場合が多いのではないのでしょうか．いかに権威ある先輩に対しても100パーセント見習うべきだ，というのではなく，共感する部分だけを取り入れるという生き方が一般的なのだと思います．逆に，先輩方にしても，われわれに向かって，こうするべきだ，というような方はおられませんし，せいぜい一緒に悩んでくれるとか，自分ならこうするが，おまえは自分の思うようにやれ，というようにある程度突き離した接触の仕方が普通だと思います．

戦前派と戦後派は同じレールを走れないのか

飯　吉　戦前派と戦後派がなかなか一つのレールの上を走れないという悩みは，かなり根深いものだと思います．われわれ昔の者には，土木には公共性があるという観念が非常に強かったのですが，現在は公共性という観念自体揺れ動いており，昔のように単純ではないでしょうし，そのうえ戦後は価値観が多様化し，自分というものを根本に置いている．そこに戦前との格段の相違があると思います．ところで，個という問題において，生きがいを見い出すとなると，土木技術者としての生きがいという問題からは離れるわけですね．われわれは，個というものを軽く見て，公共性というものを重く見ることによって，土木建設技術者としての生きがいを見い出すことができると考えていました．個というものを根底においた考え方では，土木技術者としての生きがいを見い出すことは難しいのではないでしょうか？

安　たしかに，純粋というか素朴な生きがいを求める生き方というのは，可能であるなら大変理解し易く，望ましいと思いますが，先程，先生もおっしゃられたように，現実にはなかなか生きがいというものも見い出すことは難しく，極端なことを言えば，戦前のような生きがいを求めることは，われわれ以降の年代から見れば，ないものねだりであるとも言えるのではないでしょうか．

しかし，自分の職場の中でなんらかの生きがいが見い出せるということは重要なことで，そのような環境の中で見い出されたものは，質的にも量的にも満足度の高いものだと思います．したがって，生きがいを求められるような職場を，どのように醸成してゆくかということも現代における重要な課題の一つだと思います．そこで先輩方の苦労や喜びなどうかがってみますと，「土木技術は人のためになる」ということや，「物をつくる喜び」といったことが基本にあるように思われます．これからの土木技術者の生き方を考える場合にも，その辺に＜かぎ＞があるような気がします．また，土木構造物というのは一人の人間や一企業だけで成しうるものでもなく，ゼネコン，下請，周辺領域にある他の企業など，沢山の関係者が一丸となって初めて満足度の高いものができるのではないか，そのあたりに，つまり共同作業で初めて目的が達せられるというあたりに何か手掛りがあるのではないか，と考えています．パズルではないですが「物をつくる喜び」と「役に立つ」ということ，「共同作業である」ということの三つの基本条件を，技術者としての職場での生活の中に取り込む方法はないかと模索しているのが現状だと思います．

＜個＞が優先するのか＜公＞が先か

飯　吉　いまのお話のような観点から，生きがいを見い出すのも一つの方法だと思います．しかし，先程も申し上げたように，個というものに価値観をおくと職場における生きがいは，なかなか見い出しにくいと思うのですが，その点はどうなのでしょうか？

安　その個という言葉の内容は誤解を受け易く，つかみにくいのですが，私が先程申しましたのは，別に個人の利益ではなく――もちろん，それも一つの要素だとは思いますが――もっと広い範囲の概念だと考えております．ですから，この個という概念をうまくリードしていくことが重要であり，各自が個を確立することによって世の中に貢献することができるのではないでしょうか．各人がそれぞれ謙虚な気持ち，広い視野で個というものを追求することにより，喜びや生きがいに近づけるようになってほしいと望んでいるわけです．

飯　吉　別の観点から言えば，土木というのは他の職業に比べて，そこに自分の生きがいを見い出さなければやってゆけないようなところがあると思うんです．青函トンネルの工事のように，現場まで海の底を何時間もかかって行くような仕事は，そこに何か生きがいを求めなければ，単に物質的に恵まれるというようなことだけで

は，とてもやってゆけなくなると思います．本州四国連絡橋の工事にしても，非常な危険を侵してやらなければならないような場合も起きてくると思うんです．そういう場合に，ただサラリーマンとしてその工事に携わるというだけではなく，例えば大衆のためとか，日本の土木技術を成長させるためとか，そういう何かがなければやってゆけないんではなかろうかと思います．過去の大きなトンネル工事，橋梁工事においても，われわれれの先輩は大変な苦労をし，自分の身命をかけているのです．このように，ただ単に職業としてという，ただそれだけのことであるならば，土木工事の技術者にはなれないんじゃないか，大体土木というものは，そういう性格をもっているものなんだ，と思いますが…….

新しい時代の＜新・生きがい論＞

安　たしかに，サラリーマン的な考え方だけではなかなかやってゆけないと思います．しかし，だからといって，いまの人たちに，お国のためだ，公共のための犠牲なんだと言っても理解されにくいと思います．

では，どういう考え方をすべきなのかという問題になると，これはやはり，人それぞれの価値感に基づく個の発動，個々の何がしかの目標がなければならないと思います．ここでいう目標というものには，いまの先生のお話にもあった自分の技術をみがくこと，自分で達成しようと思って立てる努力目標などが含まれると思います．ただ，その目標というのは，こうあらねばならぬ，戦前の先輩方はこういう目標をもった生き方をしてきたんだぞといった考え方は，もはやあてはまらないと思います．

ですから問題は，各人がまちまちに目標を設定したとして，それが悪い方向に向かっては困るので，それをどのようにして好ましい方向にもってゆくかということだと思います．そのためには個人の存在価値が評価しやすいような責任・権限の明確化，他の人の存在価値を理解しうること，共同作業における連帯感・チームワーク，積極的な自己啓発が生かせるような職場環境などがこれからの個と組織との関係で重要なポイントになるのではないか，そしてこのような環境下での日々の充実感や自己目標の達成が新しい生きがいとなるのではないかと私は漠然と考えております．

飯　吉　青函トンネルとか本四連絡橋などの大工事の本当の主力となるのは，建設業に従事している土木の建設技術者，しかも戦後の技術者だと思うのです．戦前派の私は，その人たちが現在の風潮のもとで，大きな工事上の障害などが起きたとき本当にやり抜けるのかという危惧をもつのですが，その辺はどうでしょうか？

安　またまた難問で困りましたが，たしかに戦前の先輩方から見られれば，頼りないやつらだと思われるかもしれませんが，あえて弁解をさせていただきます．大体昔の土木技術者というのは，どちらかというと個人の能力で物事を処理していたと思います．またそうせざるを得ない環境にあり，ですから各方面で権威者という方が出てきた．日ごろ＜なんとかの神様＞と呼ばれるようなそういうレベルの高い方がおられた．ところが，いまのわれわれの仕事の仕方というのは，もちろん個人的な資質も必要条件ですが，もっと大きな組織力で難関に立ち向かってゆく．何かありますと，ソレとばかりに研究部門，設計部門，管理部門などが一丸となって現場第一線のバックアップ体制をとり，また本社においては戦前の神様をはじめとして若いぱりぱりの理論家まで含めて多角的にあらゆる角度から検討し，最もよさそうな対策をたてろというような動き方をします．昔のように神様の鶴の一声で現場の人たちが動くという簡単な図式ではないですが，しかるべき対策がたてられて仕事が進んでゆくということには間違いはありません．

そのうえ，土木技術の発展という意味では，むしろいまの形のほうが望ましいのではないかと思うほどです．昔のようなやり方ですと，技術はある人だけにとどまってしまい，その蓄積ということになると，なかなか難しかったと思います．少し生意気なことを言わせていただけば，一人の人間が一生のうちにやれることなど，たかが知れていると思うのです．だから，神様が何年かに一人でてきて，そのたびに技術のレベルが上がるといっても，それはきわめて限られたものだと思います．それに対して，次の時代の者が，前の時代の技術者のレベルの7掛けか8掛けくらいからスタートして，先の代のレベルからちょっと頭を出すということの積み重ねは，技術の進歩にとって大きな意味をもつと思います．そういう意味で，組織で仕事をするということは，非常に大切なことではないかと思うのですが，いかがなものでございましょうか．

飯　吉　ありがたいことに，若い者でも心配ないというご意見で，私も大変心強く思います．われわれの心配は杞憂にすぎなかったようです．まあこういう問題に関しては，まだ私なりにいろいろと意見があり，できればもっと話し合いを続けてゆきたいと思いますが，今日のところはこの辺で終わりにしたいと思います．

安　どうもありがとうございました．大変失礼いたしました．

（文責・編集部／昭和 51 年3月 13 日
土木図書館5号室にて収録）

●特集・終●